第14回「文芸思潮」現代詩賞 発表

第一四回「文芸思潮」現代詩賞に多数の御応募をいただきまして、まことにありがとうございました。おかげさまで三八一名という多くの方にご応募いただき、充実したコンテストとなりました。心から御礼申し上げます。

五月末に集まった応募作の中から、まず選考委員会予選担当によって第一次予選、第二次予選、第三次予選の選考が行なわれました。それらを通過した作品を対象に、十月二十八日、松尾真由美、五十嵐勉の各選考委員により、最終選考が行なわれました。厳正な審査の結果、以下の通り決定しましたので、ここに発表させていただきます。

今号には最優秀賞・優秀賞を掲載させていただきますが、奨励賞作品も、次号以降できるだけ「文芸思潮」誌上に掲載させていただく予定です。

現代詩賞の授賞式は、残念ながら今年も割愛させていただきます。賞状・賞品・賞金などは明年一月下旬に直接受賞者に発送させていただきます。

第一五回「文芸思潮」現代詩賞は、明年も今年とほぼ同じ要領で募集を行なう予定です。どうぞ奮って御応募ください。お待ちしております。

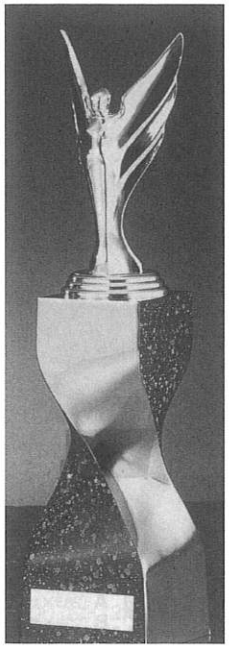
「文芸思潮」現代詩賞選考委員会／文芸思潮

第14回「文芸思潮」現代詩賞

最優秀賞

「銀河の原罪」「捕囚」

由木名緒美（福島県会津若松市）



優秀賞

「蓬莱の蔓」

「Muse Agenda Ensemble」

「夭逝の王が捧げる命の美しき犠牲のために」

昊　宣光（千葉県市川市）

「Elijah」「花の降る日」

「留マル夏（aestas stans）」

浅見龍之介（埼玉県草加市）

奨励賞

「アヴァンギャルド」「エチュード　オーパスナンバー6」
「新生と終焉」　今井　悠（宮城県仙台市）

「公園より」「Soda Seeds」「ベクトル」　中村郁恵（北海道札幌市）

「使者として走る」「獅子の時代」「帰り道」　上木戸晃（北海道北見市）

「チェックアウト」「ポスト・ヒューマン」

「たれやどり木のかげをしのばむ」舟橋空兎（愛知県尾張旭市）

「夢見月に私は狂ってしまった」「私の世界の終わり」

「12月、新宿にて」　北村灰色（埼玉県和光市）

「月」「夢」「果実」　麻生ゆり（福岡県北九州市）

「三流――さんる、あるいは、みつながれ」　町田理樹（大阪府大阪市）

「落日」「溶融」　十路田道広（福岡県糸島市）

「妹」　七羽鳩子（宮城県仙台市）

選評

テーマと主体が密接に関わることを

松尾真由美

残念ながら、今年は優秀賞、奨励賞の受賞者数がいつもより減ってしまっている。原因の一端は、作品の内実に勢いが見られなかったことが上げられるように思われる。勢いというのはテーマ（書こうとするもの）に対しての切迫感や切実感が主体から感じられないということだ。世界への違和感が詩の発端としてある。その世界に対する根源的な違和感を言葉を用いて立ち向かう行為が詩であるともいえる。だからこそというべきだろうか、表層から深層へ降りていく力が詩の言葉にはあるのだが、表層でとどまっているだけの、順当なものを順当なものとして描くだけでは詩は切実さを内包できず、作品は説得力を持てない。描こうとしているものへの精神的な胆力が足りないか、あるいは対象が自己にとってそぐわない場合もある。自分が本気で取りかかれる対象を選ばなければ詩の必然も生まれはしない。書く以前の問題として、そうしたことにも気をつけてほしい。また、言葉自体に勢いがあっても作品の内実の勢いを表わすことにはならない。言葉だけが上滑りになっていて、内実に迫ることが出来ていない、そのような作品も多々見られた。言葉を動かすにはエネルギーが必要だが、エネルギーを発散することと言葉を粗雑に扱うこととはまるで意味が違う。詩を展開させるために詩の言葉に身を任すことは必要だが、言葉の扱い方は丁寧にしてほしい。ひとつの助詞を変えることでも作品は変わっていく。そうしたことに自覚的であれば一語の言葉でも粗く扱うことはなくなるであろう。

当選作の由木名緒美「銀河の原罪」は漢語が多用され、一見古い印象を与える作品だが、ヨブ記をテーマにしていることで漢語の持つ重たさが作品に見合っていて、かつ、この難しいテーマを書ききっている印象を与えられた。ヨブ記は神の裁きと苦難に関する問題に焦点が当てられていて、悪いことをしていないのに苦しまなければならないというテーマを扱っている。そうした困難に対する晦渋さや苦渋さを創造力で象っていることに頼もしさも感じた。この作品は自分に起こったことを感傷的に描いているわけではない。ヨブ記を通した世界感を描いているのだが、そのことで己を超えた何ものかの声を発することが出来ている。大きく切実なるものに真からの切実さで対応しているからこそ、作品から感じられる叫びが主体の叫びになっていて、作品は説得力を持つ。ひとつの詩の方法としての成功

佳作

「雨の日に」　長谷川智美
「ひまわり」「橙の朝」「夜旅人」　榛太
「雨男」「花地獄」「Long-awaited grave」Eli in church　小山田良三
「友と私」「悲哀の笑い」「にしめ」　岡田直樹
「落陽」「ねがい」「ある朝にぼくは」　丸茂暉明
「優しい陽射し」「海に降る雪」　伊勢谷翔
「旋律」　関根裕治
「伴侶」
「山桜/2018」「夏物語」「照葉の記憶」　遠藤芳子
「時空のリボン」　いしぜきけいこ
「ラジオの奥から」「水分」「chokusen」　井上美帆
「叡智」「背の低いセイタカアワダチソウ」「ツワブキ」　鈴木　修
「奏者へ」「名無しの歌」「命の花」　千葉チェンヅウ
「スデニ アタラシイ フメイノ ジダイ」「危険の戯画」　福島敏真
「ハーメルンの笛吹き」「目標」「代名詞」　横井純子
「五月の詩」「曙光」「ignition」　南斗るい
「涙」「言葉の壁」「千年紀」　佐藤　裕
「スパイラル」「ただ……」「終夜」　燻人
「静寂の彼方」　深雪　朔
「動物死体処理係」　鈴木敬盛
「ぼくは縄文人」　佐藤清助
「天降る吉事」「短夏暑夜」他　加勢健一
「星落」「砂城の月」「ボヤージュ」　月海水雲
「夜行献花」「夜行挽歌」「夜行列車」　喜多山なつめ
「声」「悲しみに飽きて」「一日目がない」　天ヶ谷麗
「複製革命家」「地球をにぎる感触は」　世秋恭之介
「寿命の歌」「図書館の受刑者」「パンケーキの死神」　夏月ビビ
「軋み―原発と言葉 2011.3.11」「アスファルト」「新宿」　柏原　宥
「溢れ出た」　由希野
「くんくん、ゆらゆら」「蒼くなければ美ではない」　玉響コウ
「啓示」「塵より生まれる詩」「深淵からはえる」　川野祐理子
「物質人類」「美しい出生」「あなたに孕まれたい」　飯見八尾
「百年前の突風」「草色の扉の金色の鋲」「砂けむりの向こうに」　沖田　有
「琥珀の鯨影」「道しるべの青」「藤を生く」　相原　悠
「シーサイドパーク」「夏の記憶」「君はネオン」　伊藤あや乃
「川水をすくう」「流星の行方」「雨音響く。」　由良　佳
「苺の女王」「助手席にだれものせないブルーバード」他　秋生海猫
「病床甘夢」「真夏の吹雪」「愛読書」　由羽
「夫の靴は」「あの日は」「添い寝」　谷口典子
「青い死の水晶宮」　徳田吉映

例であるだろう。自身の個性に合った詩の方法を選び取ることも詩人にとっては大切なことである。

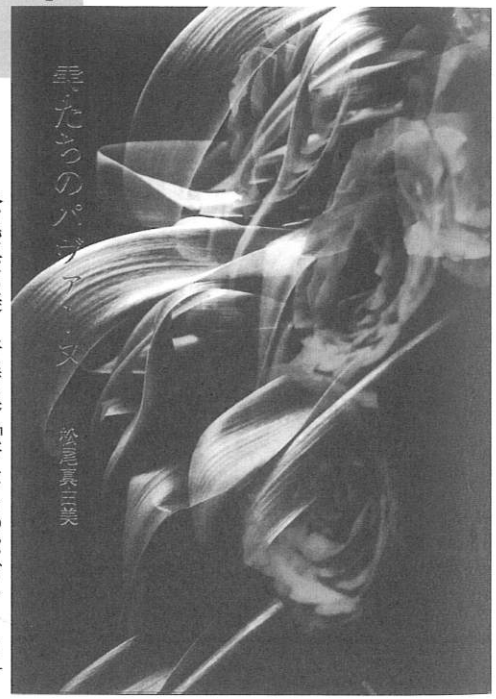
優秀賞の浅見龍之介の作品は三篇とも一定のリズムで言葉を呼び入れることが出来ていて、それが作品を一定の基準にまで押し上げているのだが、ただ、そのリズムが言葉を区切るためだけに使われている箇所もあり、そうしたところは詩の弱さに通じていく。作者は感覚的にその違いが分かっていると思われるが、作品によっては無理に言葉を句切らずに書いてみてもいい。言葉のリズムは大事だが、言葉のリズムに囚われないことも大事なことだ。三篇の中で印象深かったのは「花の降る日」。言葉のリズムと表象の自在さが相俟って美しく、「ず・ざら・ず・ざり・ず」など造語のような擬音も効果的に使われていて、リズム感がいいということは音にも敏感であるのだと改めて思わされた。こうした聴覚の良さをもっと生かしてほしい。

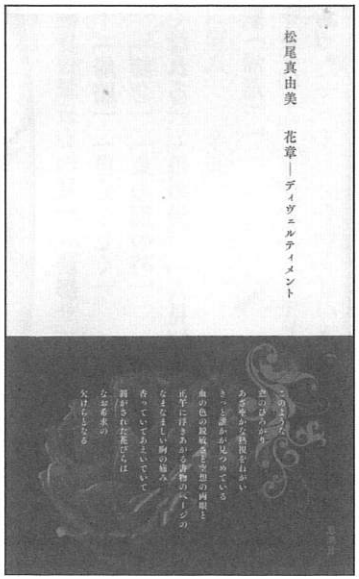
優秀賞の昊宣光「Muse Agenda Ensemble」は多少、大ぶりな形容が目立つが、テーマ性の大きさに大胆な筆致は似合っていると思われた。この作品も当選作と同じように自身の体験から来るものではなく、天地創造という問題意識から発せられていて、それゆえ、王や神、傀儡や輪廻などいまの私たちには実感として身についていない言葉が散見される。だが、こうした難解なテーマに体当たりでぶつかっていく果敢さも必要であろう。書きすぎでイメージが不鮮明になっている箇所もあり、書き終えた後に表象の細かいところを自分で見直すことも勧めたい。

奨励賞の町田理樹「三流――さんる、あるいは、みつながれ」は一篇の作品であるが三つの詩で構成され、タイトルとも呼応しており、作品全体においてもセンスの良さを感じさせた。音の自由と身体の自由がともにあり、詩の言葉によって主体が解き放されている。それは読者も解放感を味わえることでもあり、それゆえ詩を読む楽しさがある。ひらがなの柔らかさと音韻の柔らかさが一体化し、そうしたところに「現に在ることによって食いちぎられる」という一行が挟まれていて、技術が向上しているように思われた。軽い作品ではない。このような作品を揺るぎないものとして続けて書いていってほしい。

奨励賞の麻生ゆり「夢」は過去のことが夢として表われているのだろうかと思わせるほど「夢」が夢のように浮ついてはおらず、台所の情景や叔父や兄の存在も陰影を伴って胸に迫ってくる。詩の言葉への誠実さがうかがえる作品だった。奨励賞の上木戸晃の「使者として走る」は死に際の父と父の使者となる息子との交感を描く。時系列の混濁感が死に際の父の様態を表わしてもいて印象深かった。奨励賞の中村郁恵「Soda Seeds」はおはじきを一心に見つめることで出来た作品だと思う。ソーダガラスという組成を忘れないことで詩に深みを与えている。以前の中村は言葉の飛躍感で詩を読ませていたが、この頃は表現の丁寧さを求めて丹念に対象を追っているようである。その丹念さが散文的になってしまう感もあって、微妙なところであるが注意して欲しい。奨励賞の舟橋空兎は趣をまったく変えた三作品を提示。私は「たれやどり木のかげをしのばむ」に興味を覚えた。源氏物語の引用が言葉の面白さを呼び入れ、古語のリズムも己のものとしていて展開も面白かった。なかなか出来ないことのように思う。

松尾真由美
まつお　まゆみ
詩集『燭花』（思潮社）詩集『密約―オブリガート』（思潮社）第52回H氏賞受賞
詩集『揺籃期―メッザ・ヴォーチェ』（思潮社）詩集『彩管譜―コンチェルティーノ』（思潮社）詩集『睡濫』（思潮社）詩集『不完全協和音 consonanza inperfetto』（思潮社）詩集『雪のきらめき、火花の湿度、消えゆく蕊のはるかな記憶を』（思潮社）BOX詩集個展用パンフレット詩集『装飾期、箱の中のひろやかな物語を』現代詩文庫『松尾真由美詩集』（思潮社）詩集『花章―ディヴェルティメント』（思潮社）
アンソロジー『現代詩最前線』（北溟社）『小野十三郎を読む』（思潮社）『短篇集　夜』（驢馬出版）『ふるさと文学さんぽ　北海道』（大和書房）新詩集に『雫たちのパヴァーヌ』（アジア文化社）
北海道新聞文学賞（詩部門）選考委員





松尾真由美　新詩集「雫たちのパヴァーヌ」
アジア文化社刊　送料とも1728円（税込）

宇宙の果てまで届く言葉を

五十嵐　勉

第一四回「文芸思潮」現代詩賞は、奇妙な現象が起こった。それは、優秀賞・奨励賞のレベルの作品が少なかったことである。いつもはこのレベルの層が厚く、どれを落とすかで腐心するのだが、今回は優秀賞が二名（昨年は六名）、奨励賞が八名（昨年は一一名）と極端に少なくなっている。代わりに、佳作と入選は増え、こちらは昨年の倍近くになった。

これをどう見るかは悩ましいが、一時的な陥没期と受け止めるべきなのかもしれない。佳作・入選の方々の明年の奮起を期待したいところである。

そうは言っても、最優秀賞の由木名緒美氏の作品は、これまでにないもので、突出した充実ぶり以上に、飛躍を感じさせるものだった。この収穫は大きい。「銀河の原罪」はそのボリュームだけでなく、個人的な体験に根ざしているようにも思える痛切な詠唱となっており、強いリアリティを持って言葉が天上へ昇っていく。受けた傷のいたみを、人間の業としての宇宙的な広がりへ哀切と許容の態度の色を持って大きく巻き上がっていくところに、壮麗な銀河が展開する。怨みや絶望の血腥い海から出発して、祈りと希求による闇の天空への橋になっている。一つの到達点として拍手を送りたい。

昊宣光（こうのぶてる）氏は、昨年佐藤孝博の実名で優秀賞となった実力者で、続けての受賞に値する豊饒な詩世界を造形している。豊かさの点では今年の作品の方が賑わいも広がりもあるが、最優秀賞に押し切れないのは、絢爛たる語群の踊りに、明確に伝わってくる思いの深さが感じられず、やや言葉の浪費の虚しさが残るからである。三篇のうちの一つ「蓬莱の蔓」は、古典と仏教の語彙を縦横無尽に使って壮麗な過去の宴を繰り広げているが、華麗な羽ばたきに酔い過ぎていて、詩情が大きく流れていかない。現代に生きる我々の心の奥にグッと入ってくるには、何かが足りない。言葉は激しく動いているが、想念が立ち上がって動いていかない。そこに踏み留まっての華麗な重い舞になってしまっている。最もよかったのは「Muse Agenda Ensemble」で、これは「蓬莱の蔓」の古典世界とは打って変わった現代のダイナミズムに溢れ、豊饒はこちらのほうが遥かに躍動しているが、踊り過ぎて「一抹の甘露のように注がれた神酒の一滴であった。」のような不用意な味消しの部分も目につく。この詩もよく読むと伝えるべきことの実質的な深さを欠いている読後感が払拭できない。英語のタイトルでなければならない必然性も薄く感じられる。また、名前を難しいペンネームに安易に変える腰の軽

入選

「八枚の硬貨」「ココペリ」「淡影」　獅子谷雪
「小夜曲」「帰路」「自分らしく」　加藤木淳
「天の水」「諦念」「束の間の時」　福路みわ
「かわいくなれる」「母の愛」「人見知りの人に」　有澤かおり
「最後の駅（帰還）」　北原　満
「光の絵」　あおい満月
「戦争があった」　寒川靖子
「超浪漫的な夜」「曖昧模糊な時代」「愛のゆくえ」　淡谷十森
「笑う光」「光から揺れる」「暗夜の光」　大山日文
「放課後の理科室」　三ツ木健
「SM」「みなしご」「断髪式」　嫌我ナメクジ
「ひさしぶり」「青い本」「いつものような」　羽林　冬
「東京迷子」「眩暈」「宵恋」　玉井雄弥
「金魚」「パンが食いたい」　相川修一
「蝶を忘れて」「けふ越えて」　晨道珠暉
「ビートルズみたくいつまでも」他　一言足彦
「日常」「現代」「ちんぶら　かんかん」　いまだまりこ
「初恋」「どしゃぶりの雨の中で」他　矢島信子
「雪」「カテゴリーの自発性」　西條由美子
「音楽」「夢想散策」　池山弘徳
「マニュスクリプト」　藤　わかな
「アマノイワブネ」　辻　武比古

「夜桜」「ナイフ」「少年」　井村たづ子
「海と光線」　夜乃やう
「紫苑」「悠遠」　インバ薫
「あたしの靴を全て捨てたのは」他　田中美咲希
「晩秋の散歩」「幼時の夏の一瞬間の記憶」他　小山剛広
「御前4時」「鵺」「檸檬」　遊月飛鳥
「心的自堕落」「劣性友人による宗教的友愛への考察と懺悔」他　春原逞美
「花鳥・FU・月」「寒煙メイ離」「日月ゆまい」　縷々　新井優子
「いのちの選別」　新井優子
「ある湖の詩」、「散文詩『ココア情景』」　汨堯暁
「青の記憶」「無言の記憶」「或る夏の午後」　田窪ふみ
「命題」「願い」「あげる」　赤井るか
「第一の神」「第二の神」「第三の神」他　文室由貴男
「嵌らない窓」「だれのゆめのなか」他　広瀬真愛
「ダダ生活」「お前はそれでいいのか」他　阿江栄章
「アイロン」「シット」「うつくしいもの」　浪市すいか
「タクシードライバー」「くちびる」「ダディ」　サラ・カイリイ
「崩壊」　狐塚綾音
「絶つ先に望み」「辛笑」　中原夕莉
「言葉」「燃える月」「無音」　岡本麻未
「エチュード」　松岡真弓
「ネクタイ」　稲葉美佳
「あのね」「質量保存の涙」「耳鳴り」　青柳貴子
「慟哭の彼方」　永田　洋

さも気になった。ルビを振らなければ読めないようなペンネームは自己満足の域を出ず、いただけない。

優秀賞浅見龍之介氏の作品は、私としては物足りなかった。三篇の中では「花の降る日」が最も詩句に溢れているが、やはり思いの深く届いていない浅さが詩想を空転させ、言葉の「戯れ言」の領域を脱していないように感じた。詩は言葉の宙返りや曲芸を多く見せれば成り立つものではない。真に詩想が穿たれ、何かを捉えているときでなければ、詩は言葉の曲芸に堕す。それは反乱する現代の余剰物のように捨てられ流し去られていくだけだろう。詩人は魂をこそ大事にすべきで、抜殻はいかに絢爛豪華に咲き乱れていようと、骸にすぎない。「水のシャワーが15リットル　1分で　いっぺんに注ぐほど　泣き涸らすが」というふうな陳腐な表現は、李白の「白髪三千丈」の一句に到底及ばない。詩全体が流れていない。苦言ばかりになってしまったが、最優秀賞を得ている詩人だけに、奮起してもらいたい。

奨励賞のなかで特にいいと思ったのは、北村灰色氏の「夢見月に私は狂ってしまった」と「私の世界の終わり」である。ここには現実への疑いと抗議がしっかり放たれている。「気の狂れた美術館の外で焼死体と化すサーカス団／人体切断、人体発火、人体損壊ショーをR指定にしない理由」など社会の裏側の破壊性を反転させて告発する鋭さは、詩としての十分な刃を持っている。以前は入選だったレベルが飛躍している。惜しいのは結末が「ほら、金魚たちは泳ぐことをやめない」などと陳腐になってしまっていたり、途中「鏡」を畳み込みすぎる部分などが、不用意な手抜きになってしまっている。こういう部分までしっかり緊張感を維持できれば、優秀賞にもなっただろうと惜しまれる。

連続の今井悠氏、麻生ゆり氏は、安定した力にさらに気迫や工夫も加えて実績を重ねているのは、喜ばしいことだが、優秀賞に届くのは、プラスアルファが必要になる。それが何かを考えてもらいたい。もちろん二人とも今回は前回よりも力を乗せていて、それぞれに充実している。麻生氏の「月」は「赤い月を裏返せ」などの力強い表現はこれまでなかったものだし、今井氏の「エチュード　オーパスナンバー6」は一歩挑戦を果たしていて、その弾力は以前よりもはるかに豊かだが、さらにもう一つの大胆な展開がほしいところではある。麻生氏は「満ち満ちて謳う／満ち満ちて謳いたい」など重ねる言い方はくどさと単調が目障りで全体を弱くしてしまうし、今井氏のそれは、せっかく行の短長や（）で工夫しているのに、出だしが「ねえ」では、弱すぎる。また音楽用語の羅列に気づかされると、造りが薄く見えてくる。それらを乗り越えての気合いの入った結晶性が必要だろう。

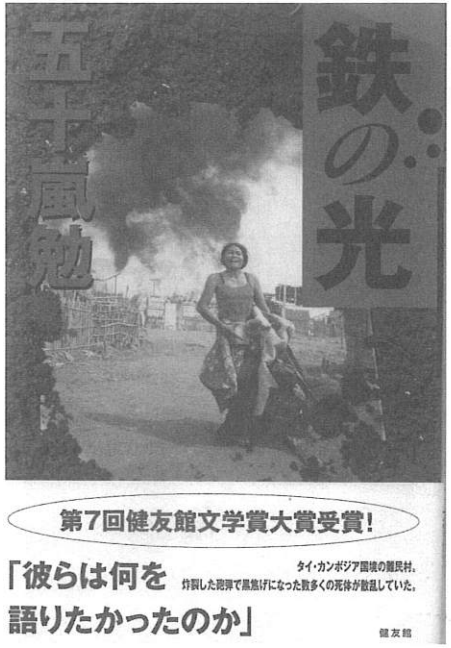
同じく連続の中村郁恵（ふみえ）氏の作品はタイトルが英語の「Soda Seeds」は斬新な発想が際立つが、なぜか「公園より」「ベクトル」など日本語として馴染んだものになると、内容までが既視感のあるものに弱まってしまう。新鮮さと発想が英語に寄り掛かってしまうのは不思議だが、なんとかこの壁を乗り越えてほしい気がする。

十路田（とろだ）道広氏は躍進株で、重い言葉には斧の鈍重な断裁力があるが、惜しいことに言葉が伸びて行かずに、一回転して弱まる傾向を持っている。振り上げ盛り上げて行きながら、すぐにうなだれてしまう先細りが、克服すべきところだろう。逆にどんどん力を得て上昇していけば、相当な展開を見せるはずである。タイトルも結末も、あっさり逃げている感が惜しまれる。

七羽鳩子氏の「妹」は「妹の鳩尾を蹴り上げた」から始まる激烈な内容で、生活そのものの凄まじさを全面に打ち出して闘いを吐露している。ある意味では地獄だが、これを率直に、ひるまずに書いているのが快い。現実は戦いであり、破滅であり、叫びである、詩のパワーの一面を素直に出していて、ストレートに届いてくるものがある。これを経験した人間は強い。これを土台とし、恵みとしていくかが、今後の浮沈を決めるだろう。その意味では魅力を持っている。

佳作の中にも心引かれる作品がかなりあった。遠藤芳子氏の「夏物語」は、きれいなタイトルとは逆に凄惨な生命への叫喚が満ちていたし、玉響コウ氏の「蒼くなければ美ではない」も鮮烈なイメージの沸騰は胸に焼き付く。Eli in church氏も「雨男」や「花地獄」はストーリーの造形力の上に咲く絢爛たる言葉は華麗である。しかしきれいな実名が映えるのに、わざわざ英語の名前を使って損をしている。徳田吉映氏の「青い死の水晶宮」にも美しい色の造形を感じたが、繰り返しの稚拙な使用が、せっかくの結晶を損ねていた。飯見八尾氏の「あなたに孕まれたい」も思い切った発想が詩の跳躍力を倍加している。

まだたくさん印象に残った作品はあるが、次回への飛躍を期待してここまでに留めたい。



カンボジア難民の悲劇を描く
1836円（税込／送料共）
御注文はアジア文化社まで

総じて、まだ詩というロケットの宇宙への推進力が乏しい。それぞれが現実の矛盾や壁に直面し、それへの抗議や反発や叫びを投じるとき、そんな程度で甘んじてしまうのか、と物足りなさを感じる。その悲痛の力で銀河まで飛ばせるような推進力が欲しい。銀河系を超えるまでの力を持たなければ神にも届かないからである。垂直方向にも力を持って宇宙の果てまで届き、水平方向にも力を帯びてたくさんの人々の胸の中で共鳴する、そして深く地の底へも届く推進力を持ってほしい。この社会と現代の軋轢と重圧は、人間そのものを圧殺しかけているほどに過重で機械の魔界であると同時にルールやシステムの地獄である。そのうえに運命や肉体の地獄ものしかかっている。孤独な生身の人間の反発だけがそれを打ち破って神に届く声になるはずである。それで初めて神と対決できることになる。

五十嵐　勉

いがらし　つとむ

1949　山梨県生まれ

79「流謫の島」で群像新人長編小説賞受賞

98「緑の手紙」で読売新聞・NTTプリンテック主催第1回インターネット文芸新人賞最優秀賞受賞

2002「鉄の光」で健友館文学賞受賞

他に中篇小説集「ノンチャン、NONGCHAN／聖丘寺院へ」長篇「破壊者たち」戯曲「核の信託」など

現代詩賞選考会風景　2018.10.28 アジア文化社図書室で

第15回 文芸思潮 現代詩賞 作品募集

文芸思潮では、清新な詩作品を募集します。志操が荒廃し、言葉の真の力が失われつつある現在、日本語の奥底に流れる感情の根を洗い、美しい言葉として表現の結晶体に高める文芸の営為は、今こそ再興されねばなりません。言葉の芯をなす強靭な詩精神を鍛え、人の心の底に響き、永くそこで生き続ける言魂（ことだま）の作品を期待します。

作品募集要項

主旨●真の言葉の力に溢れた詩作品を賞揚し、詩の創作エネルギーを顕彰する。由来や伝統に根差しつつ、現代に造形する、美しい日本語によって、言語の精神エネルギーの復活をめざす。また埋もれた才能や作品を掘り起こし、広く社会に知らしめ、作品を世に残すことによって、日本文学の興隆に寄与する。

募集内容●オリジナルの詩作品。ただしこれまで同人雑誌に発表したものを改作したものも可。一人3篇までに限る（3篇の場合まとめて送付のこと／添付別紙は全体に対して1枚のみでよい）。1篇でも2篇でもよい。

応募資格●不問

※恐縮ですが応募審査料1500円を御協力くださいますようお願い申し上げます。郵便為替には無記入・無押印でお願いします。

応募規定●

一篇は2000字以内（原稿用紙使用の場合も必ずA4原稿用紙を使用のこと。B4は失格）。3篇以内。応募審査料全体で1500円を郵便為替などで同封のこと。

ワープロ原稿はA4用紙を罫線なしで横に使い40字×30行で印字。必ず閉じること。

別紙に①応募部門（2019年度第15回現代詩賞応募作品と明記のこと）②タイトル③本名およびペンネーム④年齢・生年月日（年齢・生年月日のないものは失格）⑤〒（郵便番号は必ず明記のこと／ないものは失格）住所⑥電話番号⑦職業・略歴⑧400字詰換算原稿枚数を記したものを添付。これらを厳守しない場合は失格とする。⑨応募審査料1500円を郵便為替などで同封。外国からは14USドル。※応募原稿は返却しないので、必ずコピーを取ったうえで送付のこと（コピー送付が望ましい）。

応募先●〒158-0083 東京都世田谷区奥沢7-15-13 アジア文化社

「文芸思潮」現代詩賞　係

TEL03-5706-7847　FAX03-5706-7848　E-mail　asiawave@qk9.so-net.ne.jp

賞●文芸思潮現代詩賞■賞状・トロフィー・賞金10万円（2名7万円／3名5万円）

優秀賞■賞状・賞メダル・賞金3万円（4名以上は2万円）

奨励賞■賞状・賞メダル　　佳作・入選■賞状・記念品

選考委員●松尾真由美・五十嵐勉

締切●2019年5月31日（当日消印有効）

発表●予選通過者は2019年9月末発売の「文芸思潮」73号に発表。

受賞発表・最優秀賞および優秀賞作品掲載は12月末発売の74号に発表掲載。奨励賞なども順次「文芸思潮」に掲載する。

主催●文芸思潮

※主催者から　痛切な心の叫び、天を射抜く鮮烈な言葉、水晶のように輝く言葉の結晶、流麗な音韻の調べ、言魂（ことだま）の響きを期待しています。

銀河の原罪

由木名緒美

それは憂愁の兎だった
無垢な黒目を涙で浸し
嗚咽に背を折り月を振り仰ぐ
縁故から断絶された慟哭の
水底に響く以心のささなみ
その喚き声を宥めるために
　　私はおずおずと浮揚した

垣間見えたのは雌雄のつがぬ貌
途切れた悲嘆は来訪を拒むように
一瞬に深淵へと飛び込んだ
あぶくの渦流に虎視が陰影を蠢かせ
顕れたのは醜悪な牙
洞の眼窩に憎悪を燃やす怪魚だった

混沌の幽玄を刺し貫くには
稚魚の乳歯はあまりに浅く
相剋の齟齬は永訣の理を歪ませる
濁流は猛り狂い背鰭を飲み込み
凌轢されるままに忘却する天地
お前が喰らった成層より深い憐憫は
幼さに依拠する自恃の蛮勇だったか
その歌声に魅入りさえしなければ
罅割れた網膜も剥がさずに済んだのか

なぜあなたは不条理を愛でながら
沈黙の靄に眼差しだけを残すのか
慈悲の化身であるというのなら
その墓標をも示さぬ不在の形象を
吐唾と礫に引摺り倒してよいか

第14回『文芸思潮』
現代詩賞
最優秀賞

銀河の原罪

屠られるのは浸食されゆく傍観であり
浮遊は改竄されゆく錯視のより糸
洞窟は最奥に魂の慄きを反響させ
呪詛は躰に纏う救済の藁となる

地獄こそを示唆するのならば
永劫の罪業へと梯子を下ろせ

一房の花弁が舞い落ちる
花柱はみるみる雄々しく聳え
風にひるがえる岸辺の塔となり
たおやかさに威厳を秘匿して
それは少女の声音で謳い上げた

「何故私は胎から出て死ななかったか
腹から出た時に息絶えなかったか
何故膝があって私を受けたのか
何故乳房があり私はそれを吸ったのか」＊

業火の産み落とした胤(たね)
無為が抱き寄せた蜃気楼
やがて彼方から追随する雲海は
見果てぬ曙光を弁証する雷響となり
啼泣の雨は岩盤の瘡蓋を潤(ほと)ばかす
時は螺旋の周遊の深遠を遡り
海嘯が帰途の季節を告げる
光芒に怯える月影の遁走を仰ぎながら

悪が光を喰らうのならば
光の子は業を産み続けるか
受難をかしぐ舟に揺らげばいい
漂流の果てに着岸する佳境に
無謬の花房を見晴らすのだから
犠牲の鎖に繋がれることで
喜びの賛歌は喝采に言祝ぐか
怨嗟を酌み交わすために

銀河の原罪

隣情は惨劇を抱き寄せるのか
打つ者と打たれる者
光と陰は天秤となり揺れ動く
この目に焼き留めるのだ
踏みしめられるために結晶を結ぶ
黎明の懺悔に立ち上がる霜柱を

悲しみを知る者だけが辿り着く
無碑の桃源郷があるのならば
輪廻に見出す両輪の求心性は
共謀の終章として彗星に刻まれる

お前が跨いだ灼熱の業火は
飛び火させなければ贖え得ない
ならばその系譜を紐解くがいい
泉に影を現わせてくれたなら
必ずや繋ぎとめてみせよう

受賞の言葉

そこには不思議な穴があった。好奇心に負けて覗いてしまったけれど、それはあの世への入り口だったのかもしれない。アボリジニは、人は眠っている時に本当の世界に帰ると言う。その穴は、彼等の言う世界、たとえば命の源泉へと導く穴だったのだと思う。それでも地獄では決してなかった。何よりそう思わなければ、私の人生はただの機械の誤作動に成り果ててしまうのだけれど。それでも詩を書く者で、世界を機械論的に型にはめてだけ捉えられる者がいるのだろうか。あの世とこの世が混じり合う夜更けに、命の表皮が象られる。錯視と傍観を縒り合わせながら。その運針は、永遠に見てはいけない神秘なのかもしれないし、最も目を凝らすべき突端なのかもしれない。だから暁に目撃しようと思う。言葉を織りながら。そこにこそ生への越境、詩の曙を迎えられると信じて。

哀れな幻獣が切望したものは
肯定の僅かな安息ではなかったか
お前が擦り抜けた罪業を
身代りにしてこの胸に烙せ
憤怒と嗚咽を継ぎ代えながら
手放すべき桎梏の花を摘み
万物にさやぐ万華鏡の宙の元
優月に還すべき玉兎の落涙は
あらゆる汚辱さえ淘汰する美しさで
銀河に礫られた原罪の起源を揺り起こしていく

（＊）ヨブ記より引用

由木名緒美
ゆうき　なおみ
1983　福島県会津若松市生まれ
福島県立若松女子高校　中退
清掃会社、飲食店など経て現在編集業

第11回、12回「文芸思潮」現代詩賞
優秀賞受賞
第13回同奨励賞　受賞

ミューズ アジェンダ アンサンブル
Muse Agenda Ansemble

——ジックランド——貨幣の王として祀らわれた人類史の不毛な影に……
黄金のレシオ、子宮への密度に、神は観念となり呑まれていく。
万有に浮かぶ残滓の光、雲母は心の襞となり、胚の性を霊魂へと帰す。
産湯のゆらぎ、虚を照らす蛍光灯の影、不可避な羨望から、女の髪は記憶を綴り。
囁かれた天鵞絨の夜
時の砂から篩に掛けて
眠りの中の何者かへ名と言葉を与え
「伽藍堂の響きが蟒蛇の脊髄に一如の糸を介していた
瓔珞の美へ広がる空の門で血を天秤に架けた王妃が自らの骸を抱え
軍勢を起こした闇の傀儡により鳥瞰の目は精選される
数と音による秩序の拮抗から富の分配は生まれ
プロヴィデンスの舌で矯正された新世界
覚醒した宇宙の意識に天地創造の伝説は蘇る」
擦れ違う車窓の明暗の中、躙り寄る胎児の幻覚に狂い、死への欲動を叫ぶように。
ガラス越しの異貌の影へと償い、シジフォスの実存の光だけを捉える。
ゆれ和む樹々の葉を陽はあまりにも残酷に生かしながら。

この世の儚さから視えない風となって木霊するセフィロトの樹
神秘の息で満たされ日々の夢路を悟すように靡いていく。
人知れず眠りに就くあなたとの泪淵の禊を眇め、
円穹の死を遂げるその声を歓喜で震わせ。
嗚呼！大義でも憶測でもなく、
この至極の世界には確乎として印された闇の実相がある。
労働と対価による肉体の隷属性が、輪廻を介し生死という概念を産んだのだ。
命を貪る享楽の貨幣には、懐疑なる知恵の果実が、
あるがままの光輝を奪った。
反旗を翻す徒党のルサンチマンも
酒に溺れた泡沫の世迷言も
背徳の美で根ざして。
霰もない出自の切望により
人類への誓いは黙殺されつつあった
草も木も鳥獣も無碍に啼く聖なる今宵を永らへ。
丑満時の言の葉を、逝しき哀婉の物語さえ
風立ちぬ帆の白妙のように忘れ去られていく運命だった。

昊 宣光

――一つ目のカルキは仔羊たちの血の業を生贄とし、
木陰で憩う海馬のその美しい荒野の広がりへ
「偽りの世界」が旭光の波から露わとなる
白昼夢に合歓のシーツを召しかけて。――

重なり合いつつある法鏡へ、桜桃は接吻する。
それは潤沢なる愛の慈しみ、数え切れぬ颱で宥むる、荒寥の月。
星屑の螻蛄たち、望郷の欠けた音いろを埋め尽くすように、天は今も鳴っている。
見上げた夜空に焦がれ、皆同じ赤誠の寡であることを頑なに自負して。
繰り返す過ちを報いる度、雑種が滅んでいく自らの糧を、
惑星そのものが共存し合う、宇宙夢の記憶へ孵す。
「空」が終わりであり始まりでもある謎めいた真意を問う、
霊妙な闇が時を経るにつれ、月の光すら届かぬ山深い水の瀞に蒼い花燭は灯り。

喪神の窟で……

我が子の名へ不覚の祷りを込めた水銀の父の形見は
世を蔑む心の跛を彼すらも知りえぬ面影に
ふと気づく暁の永遠の海へと託した

――ザーヒル――

その者の目は、天国も地獄も、
ありうべき全貌として見据えていた。
一切衆生の定められた末路も、
紙一重を別つ人間の生業にすぎなかった。
とりとめのない自らの在りようさえ、
一抹の甘露のように注がれた神酒の盃であった。

終日、夜明けを待つ諦観の庭で、
凡ての罪びとが赦された
世の黄昏の時を希う。
人は赤き血をもつ命の誉れを、
誰しもが母の懐より抱き上げられた
愛欲の蚕であることを、
静謐な真我へと戒めるために
洗煉された炎を浄める。
朧げな眠りから覚めた何者かの

無数の現実に聖痕を刻み
傷みは夢へと昇華する魂の声に耳傾けて、
忘れられた故郷の幻の花園は
やがて涙の蕾となる。
いつかの夢見の砂として

汀から浚われるように

嫋やかな少女の踝が帰っていく

その消えた歳月を待ち望んで。

受賞の言葉

思えば、生きてきた道程を辿る辻褄合わせのようなものだった。怠慢に過ぎる夕暮れ、滂沱の涙に、まだ見ぬ幻の風景を探し、書くことの意義を見出していた。やらなければならない理由など、なにもないと知りつつ。妄りな生き様を正当化するように、ふと言葉を綴っていた。東京の喧騒と人の冷たさが、それを一層色濃くしていた。祈る者が犠牲となり、正直者は吠え面をかく。社会という欺瞞に満ちた囁きを鵜呑みにしては、求められるままに陵辱され、それでも赦しが、流れのままに生きるそのことが、唯一の詩と成る。価値もなく形でもない、存在することすら必要ではないもの、それこそが即ち命足りえるものとして、書くことにのみ身を捧げたい。今も、そしてこれからも、そう在りたいと切に願う。もう、後戻りはできない。言葉が魂の根幹を揺るがす限り、日々の生活も拙い思いも夢や希望ですら、詩の血と肉となり、僕をいずこへと誘う。既に、口火は切られたのだ。死に見入られた者の其れ相応の運命として。

このような栄えある賞を頂き、感謝致します。これを糧に、更なる創作へと邁進する所存です。本当にありがとうございました。

昊　宣光
こう　のぶてる
1982　東京都生まれ
日本映画大学卒業
映画製作に携る傍、小説を執筆
映画業界から去ることをきっかけに詩へ転向
現在に至る

花の降る日

竪琴ならば　リュラも　キタラも　これを女神ら　嘉したもうから
その琴糸　もしも奇しく　美しく鳴らば　花びら　麗らな空から
晴れやかなる日曜日の　青空から　柔らかに　淡く　甘やかに
舞い遊びて　降り来たらん　危うく　自転車の乗り手　われを忘れて
ハンドルの操作　誤らんほどに　ああ　忘れ難きかな　かかる時は
15リットル　15リットル　1分で　いっぺんに注ぐ　水のシャワーより
なおも豊かに　きらやかに　花の降る日の　静かな　暖かな　そのひと時は

写真屋さんなら　カメラのフィルムの巻き巻き　伸ばして　張り切り　光に
感じて　レンズを通じて　結ぶは　イメージ　掬うは　湖の水面　その手のなかに
白く眩しいページの　記憶の　どこか片隅に　今日の思い出に　保たれるように
そして　いつかも　清く　巫女たちは　そのように　捧げの歌　もたらし
竪琴　鳴らされれば　花びら降り　月日は　しかし廻り　鳥は飛んだ
不可解　方程式もさながらだ　写真に映った時計の　動かぬ顔が奇妙だ
何を意味するか　文字盤と針は　あや　今は何時　輝きながら花の降る　今は、

いつなのか　…。今も　今日も　影を落とすから　異なる子供ら　いじめの目に遭い
水のシャワーが　15リットル　1分で　いっぺんに注ぐほど　泣き涸らすが
伏せた睫毛の端には　しかし　虹が宿るという　あのわらべ謡は　空言だったか
さにあらず　さにあらざれば　純なる涙なら　これを女神ら　嘉したもうから

第14回「文芸思潮」現代詩賞 優秀賞

浅見龍之介

その雫　もしや　結び集まらば　泣いて晴らされた　日曜日の青空を飾らんか
やがてまた　駅の　上り階段や　下り階段に　人群れは満ちて　人波はうねり
ひと時に　いくらの値がつく　嘆きの谷底　世の皆　そこに沈こうとも

縛る腕時計　ちらと見るほどは　しばし思い見よ　ささやかなる　救いの時を
スプーンと言わば　そは虚空の匙　花降ると言わば　そは虚空の花
琴鳴ると言わば　リュラも　キタラも　これを女神ら　嘉したもうとも
そは　ただ　虚空の竪琴　もしまた　その糸　奇しく　美しく響かば
輝きながら花の降る　その日の　その今の　時の仮面を　打ち割らんがため
与えたまえ　純なる涙の水晶よりなる　ひと振りの剣を　そのひと時の
星生るる素顔　昼の青空のただなかに　暴き　見届けんがため　そして　いつかも

清く　巫女たちは　ず・ざら・ず・ざり・ず　捧げの歌　もたらし　ふるえは
ぬ・ざる・ね・ざれ・ざれ　降り来たらん花となりて　鳴り響いていたから
白く眩しいページの　記憶の　写真に隣りて　スペースひとつは　残されてあれ
さながら祭壇　さながら舞台だ　そこでアルルカン　ある日　ある時　永遠を演じ
今と今をつなげて　また去りゆかんがため　自転車は　廻る月日のバイサイクル
乗り手　危うく　われを忘れて　ハンドルの操作　誤らんほどに　忘れ難きは
まことの　虚空の　花の降る日の　静かな　暖かな　そのひと時

Elijah

本当に、まったく …。燃え熾れる炎に 灼熱になって 定めを担って
日照りの天 仰いで立ち 祈るは 三年のあいだ 露ひと雫だに降らざれと
宣り言うは誰か? また何ゆえか? いざや旅立て 川の流れは 涸れ果てて
古新聞紙と 砂埃 風が舞い立たす 地の面に 乾ける風 巻き起こり
曲がれる政と 禍つ報せ 嘘偽りの数多は 暴かれ 数えられたり
罪ある者をして なお幾多の罪 重ねしめよ テラコッタの偶像さながらに
その者砕けん 聖らかなる者をして なお幾重にも 聖らかならしめよ
その者の行方 いずかたなりとも ゆく道に サフランの花は 咲き輝かん

おまえか オマエカ と 割れ砕けた鏡のカケラの 反射ギラギラと
おまえが と 彼等は叫びやまず オマエガ 民 惑わす者か と
蹴破られたドア 窓のギザギザが 痛かろうに ただ しんと澄んでは
傷つけられないレンズの ひとつとして 私は と ばらけた光 集めては
民を惑わす者にはあらず と 紙っぺらぺらの この世の王を 焼き尽くす
ポテトチップス 易きにつくのは 人々の常だ しかし 逃げ水は
幻のままで ますます遠くへ 追いやられる者もろとも 追われて
蜂蜜も ローヤルゼリーも 壺のなか 黄昏のように 尽き果てて

第14回「文芸思潮」現代詩賞 優秀賞

浅見龍之介

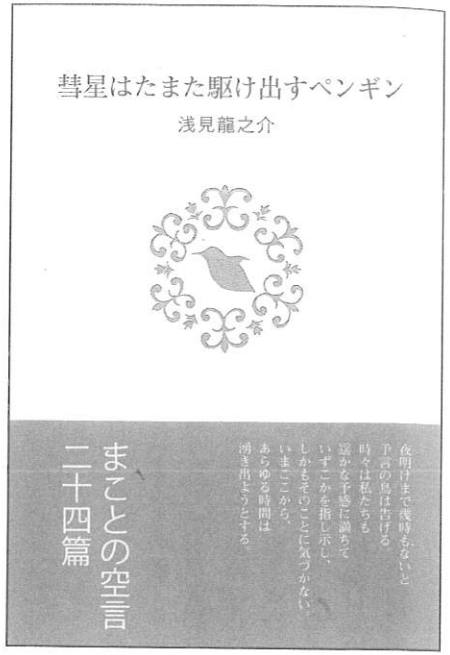
夜 死を願う者に 護りあれ 流れ去る砂を 樹の根は結び 引き留めよ
恵まれ 眠りは深くあれ 星々は 夢の冠に 編まれてあれ
倒れても 苦しみは足りて 余りありとも なお友は 遥か 残されてあり
(目醒めたら 見よ 七千のメテオが降る!)さりながら 今は
深くあまねき眠りを眠れ やがて荒れ野に 緑ぐむ萌し 芽ぐまんがため
(終わりまで 耐え抜く者に 幸いあれ)さればこそ 今は
竪琴の 張り詰めたる糸 ことごとく しばし緩めよ さなくば 望み
暗き淵より いずれの時にか 称め讃えの歌 生まれん望み 我等に絶ゆべし

うべないは 否みの否み 慈しみの雨 祈りによりて これを呼ぶなり
日照りの天 仰いで立ち 出で立ち 三年のあいだ 露ひと雫だに降らざれと
宣り言えるゆえは 本当に まったく 恵みを言わんがため 川の流れが いや増して
聖らなる栄え 地の面に満ち 人のゆく道に 幸いのサフランの花の 輝かんがため
渇ける人々 潤わんがため 求める者より 麗しき讃えの歌の 生まれんがため
裁かれ 砂漠にある彼 目醒めたら 見よ みすみす 水の滴りに 言葉 緑ぐむ
聴け 聴け 民よ 恐るるなかれ 恐るるなかれ と 告げ知らせる 光の声を
池の水面に 記され 消えては また記される その声 恐るるなかれ 赦しを と

「文芸思潮」現代詩人賞受賞詩人の第三詩集

佐山氏にとって水の面の散乱する光の群れは、時を遡る命の騒ぎだ。詩という水の流れは、源への旅を乗せて、過去へと遡る。その旅は、自身の生の意味を問いかける。「水の流れ」は自身の命の意味への深い問いだ。　「文芸思潮」五十嵐　勉

1620円（税込／送料共）
御注文はアジア文化社まで



1000円（税込）

詩の添削指導

詩人集団 J

第一線詩人による懇切な添削指導

文芸思潮編集部や第一線詩人が、あなたの詩を読み、丁寧に指導します。
あなたの詩作力、Poem に込める言葉の力、表現力がパワーアップされます。
面談も可能。詩の方向、創作のヒントもアドバイスしてくれます。
あなたの詩を詩人集団 J にお送り下さい。
連続しての指導もあります。

1編（A4／2枚以内）4000円
2篇（A4／5枚以内）7000円
※力がアップし優秀な作品は文芸思潮に掲載します。
お問合せ・お申込み・詩の送付は右の事務局へどうぞ

詩人集団 J　事務局
〒158-0083　東京都世田谷区
奥沢 7-15-13
アジア文化社内
TEL03-5706-7847

第14回「文芸思潮」現代詩賞 優秀賞

浅見龍之介

受賞の言葉

いまさらながら存在を詩作するために

詩作の何たるかを詩作するような、いわゆる詩論的な詩というものを、これまで私はあまり好みませんでした。詩人があまり自分のことばかり考えているのは、健やかなこととは思われなかったからです。しかし今回の私の応募作がそのような作品ばかりになったのは、それらがいつ着手できるかも定かでない別分野の創作に向けた準備作業としての、いわば作品のための作品であったからかもしれません。万物流転のただなかに、ひとまとまりの落ち着きを見出すことが人間の営みであるとすれば、かかる営みのアルファでありオメガとして言葉があり、詩作があるのではないでしょうか。三篇の応募作のなかで最も高い評価をいただいた「花の降る日」では、かつて古典ギリシャ語の時間に習った「リュラとキタラはムーサ女神たちの気に入る」という一文を冒頭に用いて、末長い詩神の加護を祈念しました。

浅見龍之介

あさみ　りゅうのすけ

1983年群馬県生まれ
浅間山北麓の六里ヶ原で幼少期を送る
獨協大学外国語学部ドイツ語学科卒業
第9回「文芸思潮」現代詩賞で最優秀賞を受賞